40th Anniversary 埼玉県立 歴史と民俗の博物館 Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

彩の国埼玉県

THE MUSEUM

Vol.6-2 第17号 2011.9.15

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

「円空」は、今から約350年前の江戸時代初めに活躍した僧です。

岐阜に生まれて全国を旅した円空は、訪れた土地で仏像・神像を彫りました。その数はなんと12万体とされています。

埼玉は、出身地の岐阜や愛知に次いで、数多くの円空仏が確認されていますが、その理由は定かではありません。

この特別展は、埼玉の像を中心に、円空が刻み込んだ思いを探ろうとするものです。

―1　円空、歩く―

円空は、江戸時代初期の寛永９年（1632）に生まれました。岐阜に生まれ、幼くして親を亡くし、出家、その後、寺を出て各地を巡り歩き、数多くの神や仏の像をつくり、元禄８年（1695）に入定しました。円空は自ら12万躯の像を作ったと記しています。それを裏づけるように、故郷の岐阜、愛知はもとより、主に東日本に多くの作品が残されています。なんと津軽海峡を越えて、蝦夷（北海道）にまで行っており、おそるべき行動力の持ち主です。

そして、円空はこの埼玉も訪れています。これまでに県内で確認された円空の作品は、約170躯に上っています。その多くは県東部、日光街道沿いに残されていることから、日光への道程の途中で立ち寄ったと考えられています。関東を訪れたのは２回ないし３回と考えられていますが、これまでのところ、埼玉に来た記録は見つかっていません。また年号を記した墨書銘などもないことから、残念ながらいつ訪れたのか、詳しいことは不明です。

正法院・十二神将像（子神）

さて、仏像の姿かたちは経典で事細かに定められており、仏師はそれに則って仏像をつくります。このため、肉付きがよかったり、やせ形だったりという違いはあっても本来は同じ姿をしています。

けれども、円空が生み出す像のかたちは、決まりに当てはまらないものも多く、大胆に誇張されていたり、省略されていたりと、おそらく正統な仏師では思いもつかないような発想で像をつくりだしています。さらに、一般的な仏像は檜材が多いのに対し、杉や桐などさまざまな木材でつくられています。手近にあった木切れで、短時間に彫りあげたという伝承と一致しています

―2　円空、怒る―

仏像の中で、とても恐ろしい表情を見せるのは明王や天のグループです。怒りや力強さは仏敵や人々の心の中にある悪に対して向けられたもので、火炎を背負ったり、激しくにらんでいたりと、誰もが恐怖を感じる姿につくられます。

しかし、円空の作品においては、不思議なことに忿怒の中にもどこか穏やかでユーモラスな表情が見受けられます。それはなぜなのでしょうか。また、たとえば円空の作品の中では比較的決まりに従ってつくられている不動明王像も、一つ一つが微妙に異なっています。個性的な表現を比べることで、怒りの姿の中に円空があらわそうとした思いが見いだせるのではないでしょうか。

また、このコーナーでは、約四半世紀ぶりに薬王寺と正法院の十二神将像がそろって公開となり、見どころの一つです。

大聖院・不動明王坐像

安國寺・楊柳観音菩薩坐像

トピック
円空の飛雲

円空の作品の中には、観音院・聖観音菩薩像や安國寺・楊柳観音菩薩像などのように、体の中に渦巻のような文様が刻まれているものがあります。

この文様は、飛雲をあらわしているものと思われますが、なぜ体の中に刻んでいるのでしょうか。その意味を探ります。

―3　円空、笑う―

円空仏の一番の魅力は、なんといっても、阿弥陀如来や観音菩薩などにみられる、笑みを浮かべた表情でしょう。顔が多少ゆがんでいたり、左右がずれていたりしても、その穏やかな微笑は、私たちを惹きつけてやみません。

とても細やかに彫り出したものがある一方で、小像では単純な線で簡単に目や口元を表現する場合もあります。その表現にはいずれも円空独特のものが見られます。このコーナーでは、顔や手の形の表現を中心に、簡潔な表現の中にある円空仏の特徴に迫ります。

埼玉県内の円空仏がまとまって紹介される展覧会は、当館が昭和63年に開催した特別展「さいたまの円空」以来23年ぶりです。その間に新たに確認された像も少なくありません。また埼玉の円空にゆかりのある日光や愛知、岐阜などからも御出品いただきます。所蔵者の御理解・御協力で、ほとんどふだん公開されていない円空仏を御覧いただけるまたとない機会です。ぜひお見逃しなく。

日光市輪王寺・薬師如来坐像

関連事業のお知らせ

講演会

演題　埼玉の円空仏

講師　林　宏一氏

（埼玉県文化財保護審議会委員）

日時　10月30日（日）午後１時30分から

会場　当館講堂　定員　150名

申し込みを希望される方は、いずれかの方法でお申し込みください。応募者多数の場合は、10月14日（金）に公開抽選を行います。

① 埼玉県電子申請：10月10日締切

② 往復はがき：10月10日消印有効。往信裏面に氏名、住所、電話番号、返信表面に住所、氏名を明記。１人につき１枚。

展示解説

10月９日（日）、23日（日）

11月３日（木）、14日（月）、27日（日）

いずれも午後１時30分から

今春、未曽有の大震災が起こりました。犠牲になられた方の御冥福、被災地の復興をお祈りいたします。円空の時代も天災が相次いでいました。円空は傷ついた人々の心にそっと寄り添うため、黙々と彫り続けたのかもしれません。

（特別展示担当　西口由子）

40th Anniversary「開館40周年を迎えて」

埼玉県立歴史と民俗の博物館は、前身の県立博物館時代を含めると今年11月で開館40周年を迎えます。ここでは40年の歩みを駆け足で紹介します。

第１期　「埼玉百年」を記念し県立博物館開館

昭和46年（1971）11月、埼玉県設置100周年を念する「埼玉百年」記念事業の一環として当館の前身のひとつである埼玉県立博物館が開館しました。

昭和46年は大阪で万国博覧会が開催された翌年、都道府県立の博物館施設もまだ現在のように多くないなかで、2000点以上の資料を有し、埼玉３万年の歴史と文化を紹介する人文系総合博物館の開館は全国的にも注目されました。

氷川の杜（大宮公園）の緑を活かした前川国男設計の煉瓦風建築も高い評価を受け、毎日建築文化賞を受賞しています。

11月６日の一般公開と同時に最初の特別展「埼玉百年史」が開催されています。以後今秋の「円空こころを刻む一埼玉の諸像を中心に一」まであわせて100回を越える特別展・企画展を開催してきました。

翌昭和47年（1972）には、博物館法第11条の規定に基づく登録博物館となりました。昭和50年（1975）には、学芸員の研究成果を発表する「紀要」の第一号を刊行、昭和51年には文化財保護法第11条の規定に基づく国宝・重要文化財の勧告・承認出品の展示館となり、館は着実に発展をとげていきました。

また、県立博物館開館から９年後の昭和55年（1980）には、当館のもうひとつの前身である県立民俗文化センターが岩槻市（現さいたま市岩槻区）に開館します。

「わざ」の博物館をテーマとした同館は、民俗芸能と民俗工芸についての調査・記録・保存を行う民俗文化を対象とした博物館として、全国の都道府県立の博物館としては初の画期的なもので民俗芸能・民俗工芸の実演公開、映像や音声の記録、そして芸能や工芸の技を活かした体験学習など独自の活動を展開しました。

昭和46年（1971）の開館告知ポスターと昭和58年（1983）の新装開館記念特別展「武蔵武士」のポスター

第２期　歴史系総合博物館へのリニューアル
～近代美術部門の分離・独立～

昭和57年（1982）には、県立博物館から近代美術部門が独立し、北浦和公園内に埼玉県立近代美術館が開設されました。

それに伴い昭和58年（1983）埼玉県立博物館は、歴史系総合博物館として「埼玉における人々のくらしと文化をテーマにリニューアルオープンします。新装開館記念として特別展「武蔵武士」が開催されました。また、翌月には国宝「太刀（銘景光景政）」を購入しています。

埼玉県は世界の自治体と友好関係を結んでいますが、昭和60年（1985）の特別展「メキシコの民芸展」を皮切りに、翌年には「古代メキシコ・オルメカ文明展」、昭和62年（1987）には「山西省物産展」、平成元年（1989）には「クィーンズランド文化展」と、昭和の終わりから平成のはじめにかけては友好関係にある世界各地の歴史と文化を紹介する国際的な交流展も開催されました。

平成３年（1991）県立博物館は、開館20周年を迎え、記念展「さいたまの名宝」が開催しました。そして記念展の開催と図録の出版により埼玉県教育委員会教育長表彰を受けています。さらに、平成７年（1995）と８年（1996）には、「太平記絵巻」の第七巻と第二巻が購入され、「太平記絵巻」の購入と公開で再び教育長表彰を受けています。

また、平成11年（1999）には、埼玉の近代化の一翼を担った鉄道の歩みを紹介する特別展「さいたまの鉄道」を開催し、期間中約37,000人もの入館者を集める好評を博しました。平成14年（2002）には2002FIFAワールドカップ™が日韓共催で開催されたのを記念して特別展「蹴鞠ーＫＥＭＡＲＩー」を開催しています。

第３期　誕生「歴史と民俗の博物館」
～埼玉県立博物館施設の再編整備～

平成18年（2006）４月、県立博物館施設の再編整備により、県立博物館と県立民俗文化センターが再編統合され、現在の「埼玉県立歴史と民俗の博物館」が誕生しました。

歴史・民俗・古美術の分野を広域的、総合的、多元的に扱う人文系総合博物館として生まれ変わった歴史と民俗の博物館は、昨今の県民の生涯学習の定着や協働意識の高まり、少子高齢化社会に対応し、幅広い層の県民に対してより親しみやすい展示と参加しやすい学習機会を提供できる誰にもやさしい博物館づくりに取り組んでいます。

平成19年（2007）には、新体験学習施設「ゆめ・体験ひろば」もオープンし、その機能も一層充実しました。

まだ万博の夢さめやらぬ昭和46年のオープンから今年で40年、おかげさまで当館も「不惑」を迎えることになりました。これまでも、これからも、県民の皆様とともに、惑うことなく郷土埼玉の教育や学術文化の発展に寄与すべく歩んでまいりたいとおもいます。　（企画担当　服部武）

平成元年（1989）の「クィーンズランド文化展」と平成3年（1991）の開館20周年記念展「さいたまの名宝」のポスター

埼玉県立歴史と民俗の博物館の沿革

昭和34年	1959	12月埼玉県立博物館の設置についての請願を県議会において採択
昭和43年	1968	８月埼玉県立博物館建設基本構想を決定 11月株式会社前川国男建築設計事務所へ設計を委託
昭和45年	1970	１月埼玉県立博物館新築工事起工
昭和46年	1971	11月埼玉県立博物館条例を制定。近代美術館部門を含む人文系総合博物館として開館 開館記念特別展「埼玉百年史」開催
昭和47年	1972	９月「太平記絵巻（巻第一）」を購入 11月博物館法第11条の規定に基づく登録博物館となる
昭和51年	1976	文化財保護法第48条に基づく国宝・重要文化財勧告・承認出品の展示館となる
昭和55年	1980	11月埼玉県立民俗文化センター開館
昭和56年	1981	８月博物館基本展示等改善方針を決定 12月博物館施設改修工事基本設計を株式会社前川国男建築設計事務所へ委託
昭和57年	1982	11月埼玉県立近代美術館開館（近代美術部門が独立）
昭和58年	1983	10月展示改装工事（歴史展示室・郷土学習室）完了 11月歴史系総合博物館として新装開館し開館記念特別展「武蔵武士」を開催 12月国宝「太刀（銘 景光景政）」を購入
昭和60年	1985	特別展「メキシコの民芸展」（初の海外交流展）開催
平成３年	1991	10月開館20周年記念展「さいたまの名宝」開催
平成４年	1992	３月記念展「さいたまの名宝」と記念図録の出版が埼玉県教育委員会教育長表彰を受ける
平成５年	1993	４月国宝「短刀（銘 景光）」を購入
平成７年	1995	10月「太平記絵巻（巻第七）」を購入
平成８年	1996	４月「太平記絵巻（巻第二）」を購入
平成９年	1997	２月太平記絵巻の購入・公開等が埼玉県教育委員会教育長表彰を受ける
平成10年	1998	６月インターネットにホームページを開設 １１月建設省設立50周年記念事業「公共建築百選」に選定される
平成13年	2001	11月「太平記絵巻（巻第十）」を購入
平成14年	2002	５月2002FIFAワールドカップTM記念特別展「蹴鞠ーKEMARIー」開催 ７月「太平記絵巻（巻第六）」を購入 11月第４回日本建築家協会25年賞受賞
平成18年	2006	４月県立博物館施設の再編整備により、埼玉県立歴史と民俗の博物館として新装開館 特別展「芸能絵巻ー舞い踊り囃すー」開催
平成19年	2007	４月新体験学習施設「ゆめ・体験ひろば」オープン
平成23年	2011	特別展「円空こころを刻むー埼玉の諸像を中心にー」を開催 11月開館40周年を迎える